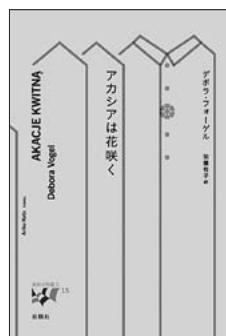


# デボラ・フォーゲル 著・加藤有子 翻訳 『アカシアは花咲く』

松籟社、二〇一八年  
室 淳子



文学は普遍的な魅力を常にもっていると思う。読書は時に旅に喩えられるが、太古の時代を描こうが、近未来を描こうが、見知らぬ土地の見知らぬ人々を描こうが、その世界に入り込むことができる。ただ、その時空間を共有していればこそ心に訴えるものもあるのだらうと思う。

大学生のときに講読の授業で小説を読んだが、辞書を調べても分からなかったのが、例えば植物や鳥の名だ。もちろんそれは慣れていくことによつて、あるいはその土地を訪れることによつて親しみを覚えるようになったものもある。今は画像を見つけることも簡単だが、庭先の花や通りがかりに目にする樹木のように、土地の人が空気のように親しみ、日々の中で積み重ねていく思いを共有することは難しい。

加藤有子先生が歳月をかけて翻訳を手掛けた、デボラ・フォーゲルの『アカシアは花咲く』を読んでいくのは、最初は正直に言えば難しかった。木々や草花、通りの名、布地の名称はなじみがなく、知っていてもイメージを繰り広げることは難しい。収められた最初の中編「アザレアの花屋」は、季節のめぐりに重ね合わせるように生への思索をつづるが、言葉とまた別の言葉とのつながりがすんなりと頭に入っていない。春に芽吹く青葉が粘着質を帯びるのは想像できるが、粘着質という言葉が頻出させるフォーゲルの感覚に近づくことができたかは分からない。何がだめになったのかも、私には分からない。

それでも、フォーゲルの作品はまったく分からないというわけでもなかつ

た。ただ、なるほど、こういうことが言いたいのかと理解しかけてはまた離される、そんな印象の連続だった。急いで読んでしまう本ではない。時間をかけたらそれで理解ができるかというところ、そういうわけでもないかもしれないが、慈しむように翻訳されたこの作品は、装丁も挿絵も含めて、置かれた言葉ひとつひとつに意味があり、簡単に消化されてしまうことなど許さないのかもしれない。じっくりとひとつひとつを解釈していくこともできるのかもしれないが、そうする必要もないようにも思う。あくまでもさりげなくイメージを追っていくことをフォーゲルは求めているのかもしれない。面白いのは、そのように苦勞しながらも、フォーゲルの作品は結構好きかもしれないと思わせるところがあることだ。なかでも、「鉄道駅の建設」は好きだなと思った。三つ目の中編で、フォーゲルの感覚に慣れてきたのかもしれない。鉄道駅が建設されていく過程を静かに見つめ、パーケリンのようなアザミやキンポウゲの野原、コンクリートの灰色、まっすぐなレール等の物質を観察するフォーゲルの視点が面白かった。

本書には、『アカシアは花咲く』の出版当時に寄せられた同時代の作家B・アルクヴィットによる書評とそれに対するフォーゲルの書簡とそれへの返信、また交友関係にあった作家ブルーノ・シユルツによる書評が掲載されている。フォーゲルの作品を詩、むしろ絵画であるとし、疑似シユルレアリスムと表現する評価にも、フォーゲル自身がモンタージュと捉え、比較として言葉を置いているという説明にも頷くことができる。

翻訳者による丁寧な解説が続く。ポーランド語と後にはイディッシュ語で執筆を行うことを選んだフォーゲルの生い立ち、両大戦を挟んで国家への帰属を頻繁に移すことになった町、ナチス・ドイツの侵攻により、ゲットー内で行われたユダヤ人一掃作戦による死。ひとりの人としての生涯にも、その時代にも、作風にも、多くの考察を行うことができる。名前だけが知られていたフォーゲルを改めて評価する意義がよく伝わる。

私が個人的に好きだったのは、『アカシアは花咲く』を十数年前の古本屋で手に入れたという翻訳者のエピソードだ。その姿を学内で見かけた翻訳者の後ろ姿に重ね合わせてみる。本書は、十数年かけて刊行に至ったそうだが、若い学生さんたちが何か今それとは知らずに出会うものが十数年後に形になるかもしれない、そんなメッセージも読み取った。